解説：
シンポジウム報告「日中比較塩業史研究――その可能性を展望する――」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-05-06 キーワード (Ja): キーワード (En): Tohoku Gakuin University 作成者: 谷口, 満 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/584

シンポジウム報告
日中比較塩業史研究
―― その可能性を展望する ――

解説

東北学院大学アジア流域文化研究所は、以下の要項で公開学術シンポジウム「日中比較塩業史研究 ― その可能性を展望する ―」を開催した。

日時　平成 25 年 9 月 21 日（土）
会場　東北学院大学土樋口キャンパス 8 号館 5 階押川記念ホール
プログラム
　主旨説明　谷口　満（東北学院大学）
　基調講演　「福島県浜通り塩業史をふりかえって ― 流失した松川浦塩田遺跡 ―」
　　岩本由輝（東北学院大学名誉教授）
　発掘報告 1 「重慶東南部郁江流域塩業遺跡の発掘と研究」
　　牛　英彬（重慶市文化遺産研究院）
　　通訳・時　　堅（東北大学大学院）
　発掘報告 2 「山東省南河崖西周煮塩遺跡の発掘と研究」
　　王　　青（山東大学）
　　通訳・槙林啓介（愛媛大学）
　専題報告　「四川盆地の塩業技術」
　　白　九江（重慶市文化遺産研究院）
　　通訳・水盛涼一（東北大学）
　総括コメント　「日中塩業考古に従事して」
　　村上恭通（愛媛大学）

このシンポジウムは、当研究所が推進している私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「新時代における日中韓周縁域社会の宗教文化構造研究プロジェクト」による研究成果公開事業の一つとして実施したものである。研究課題のとおり、周縁域社会の生活紐帯として機能している宗教事象を日中韓比較史の視点から研究しようとするのがこのプロジェクトの

目的であり、そのなかで地域特有の産業と結びついた地域信仰の様相を比較研究することが、目下のところ研究テーマの一つとなっている。塩業がそういった地域特有産業の一つであることはいうまでもなく、そこに塩神信仰が生まれて地域住民の一体感と矜持感を維持する役目を果たしていることは、日中韓の周縁域社会に共通する宗教事象である。そこで日中韓周縁域の塩神信仰に関する資料収集と現地調査を鋭意試みてきているのであるが、その研究の前提として、そもそも塩業史研究の現状を理解しておかねばならないという意見があがってきたのは当然というものであろう。本シンポジウムは、そのような意見にしたがって実現したものに他ならない。

このシンポジウムの開催に当たっては、愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センターから全面的な協力を頂戴した。当研究センターは山東大学考古系や重慶市文化遺産研究院と恒常的に研究連係を実施しており、シンポジウム報告者招請の仲介をはじめ、種々な点でご配慮を賜ったのである。所長村上恭通先生と助教槙林啓介先生にあつく御礼申し上げたい。

本誌本号には、このうち牛英彬・王青・白九江三先生の口頭報告をシンポジウム記録として、翻訳文によって掲載することにした。著者の三先生及び通訳・翻訳の時堅・槙林啓介・水盛涼一の三先生に感謝申し上げるとともに、本誌『東北大学論集・歴史と文化』への掲載をこころよくご承認下さった東北学院大学文学部歴史学科に深甚なる謝意を表したいと思う。

なお、掲載した 3 篇の文章は、牛・王・白の三先生が、さまざまな聴衆を想定して口頭報告用に準備してくださった原稿を、時・槙村・水森の三先生が翻訳して訳稿を作り、その 3 篇の訳稿に対して谷口が字体・表記などの統一を加えて完成させたものである。すなわち、三先生が意図されたのは純粋な学術論文ではなく、あくまで口頭報告用の原稿であり、さらに訳稿→整理の過程で、中国語表記と日本語表記の調整や字体･表記の統一など、いくつかの改訂が生じている。したがって、3 篇に示されている知見を学術上の目的で利用される場合は、この 3 篇ではなく、牛・王・白の三先生が学術論文・学術報告として中国国内で公表されている、あるいは公表される予定の文章から直接引用されるよう、読者諸賢にここにとくにお願いしておきたい。

（谷口　満 記）